

農林水産省 東北農政局

秋田ニュース

第 8 号

平成28年8月発行

秋田県拠点では、管内農業者及び
関係者等の方々の地域活性化に向けた最新の取組を紹介します。

Akita Branch Office,
Tohoku Regional Agricultural
Administration Office

冷凍カット野菜の加工販売による 新たな経営戦略にチャレンジ

農事組合法人たねっこ 野菜加工センター設立

「農事組合法人たねっこ」は、稲作経営に加え地元で生産される野菜の付加価値を高め、複合経営の推進により農業経営の安定化を図ることを目的に、平成25年に野菜加工センターを設立し、特に冷凍カット野菜分野に重点化して野菜加工販売を開始した。

平成27年に学校給食センターから新たな商品の提案を受けたことをきっかけに、冷凍大豆クラッシュと冷凍野菜ペーストの製造を開発し、農林水産大臣より総合化事業計画の認定を受けた。

当組織の従業員は野菜加工センターで5名、農産物生産部門で6名の正職員を雇用し、パート雇用を含めると地域から延べ3,500人が年間を通して働いている。加工野菜の売上げは2年間で1.5倍に伸びている。

「農事組合法人たねっこ」は、小種地区で開始された県営担い手育成基盤整備事業による1ha区画整備事業を契機に「これまでの個人農家経営では地域を守れない」との、小種地域5集落130戸の農家による意識の共有があり、平成17年に県内最大規模の特定農業法人として誕生した。当組織の経営面積は水稻180ha、大豆100ha、野菜13ha、花き1haとなっている。



【野菜加工センター（旧西仙北中学校）】



【加工野菜の洗浄】

「たねっこ」の名称は地域の旧小種小学校のスローガンだった「たねっこパワー」からいただいた。組織で担い手の育成をすることが我々役員の責務、現場を担う20代の若い職員は農業の経験がないにもかかわらず農業技術検定の2級を取得するなど「担い手は地域の宝」と語る 工藤代表

作業日誌を記入し栽培技術の向上

地域の担い手となり得る人材を確保するため、新規就農事業を活用して新卒者を雇用している。経験の浅い新規雇用者は栽培技術の早期取得が大切なため、各種の研修や講習に積極的に参加させ、日々の作業で気付いたことを毎日作業日誌に記入し、ミーティングで情報共有することにより、栽培技術の向上を図っている。収穫した大豆の1・2等級の割合が86%を維持しているとともに、高品質な加工用原料野菜の生産に努めている。

カット野菜はそれらの高品質な加工用原料野菜を使用し、さらに品質向上に努めることにより実需者から高い評価を得ている。



【2月に播種したたまねぎの収穫作業】



【冷凍ブロッコリー】



【冷凍かぼちゃ】



【冷凍チングン菜】



【冷凍大豆】



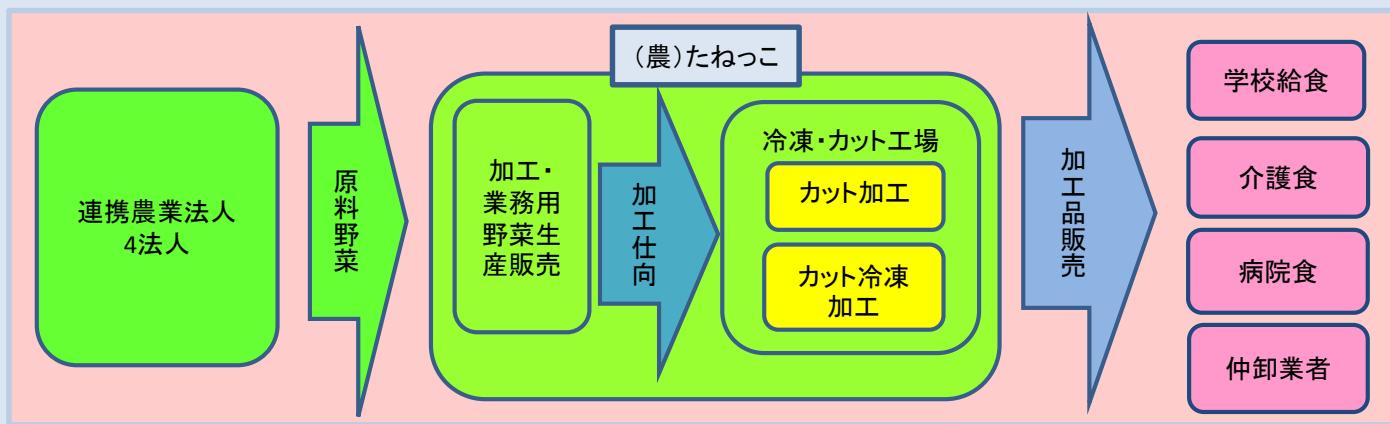
【冷凍里いも】



【冷凍小松菜】



【冷凍むき枝豆】



新入社員の紹介～入社二年目～～秋田市出身の大畠龍馬さんにインタビュー～

★入社のきっかけは

秋田県立大学在学中に農業に携わりたくて、農業法人を希望していたところ、大学の先生から紹介され、二週間のインターンと面接を経て入社しました。



★六次産業化にどんなイメージを持っていますか

十分な人手や他の企業に負けないだけの技術があれば理想だと思います。しかし、実現するのは難しいというイメージがあります。

実家は非農家という大畠龍馬さん

★主にどんな作業を担当されていますか。また、その作業で大変だったこと等ありますか

主は水稻、大豆の生産です。野菜の作業に加わることもあり、全般にわたっています。最初、農機具の扱いや作物をどう収穫すればよいか分からず、作業に時間がかかってしまったことです。

★事業の取組に期待することや抱負などお聞かせ下さい

雇用者を増やしていくなら良いと思います。今は、全ての作業を完璧にこなすため体力を付け、しっかり覚え、頑張りたい。

【取材者コメント】

工藤代表は「関係機関からの情報を経営戦略に向けながら、問題意識を共有し、自分たちの基本スタンスで、自分たちでできる事をしっかりとやることだ」と話され、組合員の自主性が組織力の向上につながっていることを感じました。今後、高齢化が進む中で若者にも希望を持って就農できる地域雇用の場として、地域農業の活性化を図るほか次世代に引き継げる法人経営を目指すという「たねっこ」さんに注目していきたいです。